

ペルシヤの工芸

—サーサーン王朝の工芸—

(工芸研究室) 梶田通子

サーサーン王朝は紀元226年から紀元641年に至る約四世紀間にわたって存続したもので、ペルシヤ帝国の中のサーサーン王朝はイラン民族がその長い歴史の過程を通じて集積してきた実力が総合的に発揮された時代です。サーサーン王朝の工芸でもっとも重要な役割をもたらしたものは金属ですが、銀製容器のデザインの圧倒的な特徴はまず宗教的テーマ、王の狩猟情景、植物、動物、宮廷の儀式的な情景、簡単な飾り花や、植物の描象的な模様のあるもの、又その審美的効果をねらう媒体の形の美しさに完全に頼り全然飾りのないもの、水、草、木、及び豊産の女神、サーサーン銀器のあらゆる装飾形式を支配するつる草、音楽や踊り子や娯楽の他の形式の場面、レスニングや剣闘士の決闘場面などがあげられます。特に皿などにはスカーフ（肩かけ）を持っているきれいな裸体の踊り姿や女神、踊り子が主題として立っていることです。水さしには植物の形、小鳥、三組山の輪、

動物などがあり、つる草から果実をもぎとる狐、熊、兎、鳥はこのテーマの古典的表現の典型的なものといえます。技術的な面においては高度に発達し、鑄造、彫金、打出し、などの各種にわたって作りだされています。高度な技術を発揮したものとしてシャープ二世（紀元309年—紀元379年）の「狩猟」の銀皿の断片があげられます。さらに高度なものとしてシャープ三世（紀元338年—紀元388年）の「獅子狩り」をあげることが出来ます。

サーサーン王朝の工芸芸術は古代イラン伝統にのみ成立したのではなく、幾度かの周辺の外来文化の影響を受けて完成されたものといえるでしょう。

参考資料として「美術全集」「ペルシヤの歴史」など他、参考にしました。これからも工芸の歴史について勉強していきたいと思っています。